筑前國續風土記卷之二十二目錄

怡土郡

高祖社 高祖山 如意

金龍寺 三雲 佐々禮石社

染井山 飯氏村 高麗寺村

大門村 周船寺 夷魔山

安上 鉢伏山 叶嶽

千里村 末永村 井原村曾根原

井原山 井原川 瑞梅寺

雷山 雷川 御坂村

多久村 篠原村 飯場村

水無

公領

長野村 小倉山 龍國寺

楠田寺 東村 神有村

岩本村 加布里 田中村

深江 怡土濱 一貴山
子負原 深江川 久安寺
浮岳 志名子村

唐津領

葉島 吉井川 橋嶺
鹿家嶺 包石 關屋三所

筑前國續風土記 卷之二十二

貝原篤信選定

貝原好古編錄

竹田定直校正

怡土郡

日本紀には、伊觀又伊都と書り。日本紀第八仲哀天皇紀に曰、天皇熊襲を討んとて筑紫に幸し給ふ時、筑紫の伊觀の縣主の祖五十迹手、天皇のいでますを承り、五百枝の賢木を抜て船の舳艫とらへに立て、上枝かみつえには八尺瓊やさかにをかけ、中ツ枝には白銅鏡をかけ、下ツ枝には十握の劍を懸て、穴門長門國也引島に參迎て是たてまつを獻り、因て奏して曰、臣やつがれ此物を獻る故は、天皇八尺瓊やさかにのまがれるがごとく、以て曲妙たへにみよしらしめせ、且ますみの銅鏡の如く、以分明あきらかに山川海原をみそなわせ。則此十握の劍を提て天下を平げ給へと申。天皇五十迹手とてを譽給ひて、伊蘇志と宣ふ故に、時の人五十迹

手の本の土くにを號けて伊蘇國と云。伊觀と云は訛也。

篤信曰、いそしとはいさをしと云ふ意にや。或人の曰、いさましと云こゝろにや。筑紫國風土記には

五十迹手は高麗國意呂山自天降來日梓ほこの苗裔也。

垂仁天皇三年併三月、新羅王于槍槍來朝の事、日本紀に見えたり。天皇五十迹手をほめて、

格手いそし、謂伊蘇志と宣ふ。五十迹手が本土を格勒國と云べ

し。今怡土郡と云は訛也と見えたり。釋日本紀に見えたり。此郡

は南に高山長くつらなり、東に高祖山そびへ、其西

は廣原の田地にして、村里多く相並べり。北に志摩

郡ふさがるといへ共、海遠からずして魚鹽乏しから

ず。山野近くして薪木の便有。川淺く、下流ふさが

らずして水災なし。多久村より西の方、包石えいに至迄、

其行程九里は海に近し。此間は國の西裔えいにして、其

形漸せばし。凡國中にて郡の長きは、遠賀と怡土郡

にしくはなし。此郡東は上原より西は包石に至り、

其長さ六里餘、南北は二三里、猶所によりて廣狹有。

田地廣く山川美にして、古跡繁し。村民に原田家士

の子孫多し。田夫といへ共、言語いやしからず。頗

世事に馴たり。唯恨らくは、風俗質朴ならず、誠實
少なし。

和名抄に出る所の怡土郡の郷の名八有。

飽田あくだ 託たくの 杜もり 今多久と云村有。
大野おほの 長野ながの 野の 今も村の名に残れり。
雲須くも 良人 石田いしき
海部あま

今稱する所の村の名

井原村 松井村 井原山村 鹿我子村 同上
瑞梅寺村 井原山村 瑞梅寺村に屬す。
水無原村 瑞梅寺村の内 西堂村 川原村 西堂村に屬す。
上川原村 西堂村の内 千里村 高祖村
柵村 高祖村の内 三雲村 原際村 三雲村の内
野村 同上 大門村 染井山村 大門村の内
井田村 二坪村 井田村 徳吉村 同上
王丸村 高麗寺村 今高來寺と云け訛也。
宇田川原村 三坂村 正蓮寺村 三坂村の内

雷山村 いかづちやま

片峰村

電山村の内

高野村

同上

筒原村 同上

多久村

中原村

多久村の内

立屋敷村 同上

飯場村

野河内村

飯場林の内

末永村

鹽手村

末永村の内

山北村

浦村

山北村の内

高上村

飯氏村

篠原村 しのはら

延命寺村

篠原村の内

周船寺村 すせんじ

上原村 かみのはら

相原村

上原村の内

徳永村

北原村

徳永村の内

横濱村

同上

右福岡領、今案ずるに、秀吉公天正十五年、小

早川隆景に筑前國を賜りし時、博多は古へ唐舟

の着し所、名勝の地にて富人多く、京畿他國の人

集り、廣き町なれば公領とすべしとて賜らず。

隆景おもへらく、城邊に公領有ては國政を一致

に行るべからず。且盜賊罪人ほとう逋逃えんそうの淵藪とも成

ぬべければ、萬に付妨多かるべしとて、怡土郡

の内を其代地に捧て、博多を領せらる。慶長五

年、東照神君より黒田長政に此國を賜りし時も、

先例に任せて怡土都の内博多の代地は賜らず。

故に左に記す所の三十九邑は、今も皆公領及他

領に屬して、國主の有に非ず。

松末村 の深江の邊 片山村 の深江の邊 濱窪村 の松末の邊

田中村 の神有村の西 加布里村 かむり 神有村

本村 古は河上本村といふ。 東村 古は河上東村といふ。

松國村 の迫戸の北 武村 の田中の北 瀬戸村 の長野の北

波呂村 石崎村 の波呂の北 長石村 の唐原の下

滿吉村 の迫戸の西 唐原村 たうはる 迫戸、長石の山の腹に在り

小藏村 長野村 大村也。高三千石方壹里。

飯原村 の三坂の西 藏持村 八島村

香力村 有田村

平原村 曾根原の下 有田村の枝村 富村 多久と有田の間

片峰村 の川原の邊 堀村 の本村の近所 佐波村

大入村 深江村

眞名子村 一貴山の南 山の内越に在り。 一貴山村 いきさん

淀川村 の深江の西南 河原村 の一貴山の下の 岩本村

右公領

吉井村 福井村 此村の内公領少有。福井浦屬之。

鹿家村

右唐津領 土井氏領之○福井村の内公領少有之。

以上八十七村

内 六十一本村
二十六枝村

○高祖社

高祖山の西の麓に在。高祖社三座、中は高祖大明神、左は竈門山神、右は神功皇后也。神殿は乾に向へり。是異敵降伏の爲成べし。高祖大神とはひこほ、てみの彦火々出見尊を申奉る。世々の帝皆此御神の御裔みすえなれば高祖と云る成べし。神功皇后三韓を討給はむとて、此御神にも祈せ給ふ故に、後世に至りて皇后を相殿に祭り侍るとぞ。俗説には、原田氏代々高祖村に住せり。かれは後漢の光武帝の遠孫なれば、漢の高祖を崇め祭りし社成と云共、さにはあらず。原田氏此所に住せしは源頼朝卿の時なれば、神鎮座の時より遙後の事也。

三代實錄に、元慶元年九月廿五日、筑前國正六位上高磯比咩神たかそひのに従五位下を授給ふと有も、此御神の事也。高祖を高磯とも書り。此外、他の雜記にも高磯と書り。神功皇后も此神に祭られ給ふ故に、高磯姫と稱るならん。又高祖の字、古き棟札などには詫祖とも記せり。九月廿六日祭禮有。昔は神輿三雲村に幸有しか共、今は其禮絶ぬ。永正二年原田彈正少弼おきたね興種御社の頽破たいはに及べるを歎て、改て建立し、元龜二年原田彈正親種重建せり。今の社に天文十年に、原田彈正隆種作りけるを、寛文二年に國君光之公修補し給ふ。石の鳥居は元祿六年創立す。額のの字は花山院内府定誠公の筆也。好古が乞により、筆を染給へり。村下に昔の大鳥居有。址有。

○高祖山

怡土郡の東、高祖村の上に在。南北に長くつらなれり。山上に原田氏城址有。西の麓に原田氏常の居宅の址有。又村中古宅の跡多くして、境内廣し。山下

成故、かたさがり成村里也。

○如意

高祖村に屬す。高祖本村より七八町北の方の山中に在り。民家數戸有。其上の方に如意輪觀音堂有。此所は昔如意寺とて寺有し跡也。故に如意と云。俗にねをひと云は訛也。此寺の本尊は如意輪觀音成故寺號とす。其本尊は聖德太子の御作也と云傳て今に在。其寺の下の方に妙立寺とて、日蓮宗の寺有しを、寛文十二年日清と云僧、此古寺の跡に移す。如意輪寺の舊地なれば如意山と號す。寺は妙立寺と號す。彼如意輪觀音の木像も爰に安置せり。此所深山窮谷に非すと云ども、幽僻の地にして塵境ちんを隔る故に、常に詣來る輩稀也。清き瀨有。向にちかく山有。櫻鶴冠かんで木杯など有て、春秋は殊に見るに堪たり。人聲まれにして、唯水の音鳥の聲のみ聞えて、心閑に日長く、誠に奇絶なる佳景也。暇有人は爰にあそぶべし。

○金龍寺 曹洞宗

高祖村に在。高祖の城主原田彈正少弼弘種は、大内家に屬し、周防山口に年々祇候せし時、山口の琉璃光寺の桃岳瑞見和尚を渴仰して、禪法に心をよす。

或時和尚に云けるは、我居城高祖に寺院を創立し、

桃岳和尚を開山とし、其門弟慶庵瑞賀和尚を第二祖

とし、招請すべしと契約し、永正五年に、初て高祖山

の麓に山を開きて寺を立、其父彈正少弼種親法名悦岩の

菩提所とし、太祖山金龍寺と號す。故に種親を金龍寺

殿と號す。桃岳は山口に在て元祖とし、實は慶庵を

以て此寺第一の住持とす。享祿三年二月、原田興種

より田島六町を寺領として附屬するよし、寄進狀有。

又原田隆種は父興種の爲に、田地一町寄附せり。弘

治三年八月、隆種が二子種門、繁種、志摩郡岐志村に

て討死せり。此事は志摩郡の記に詳に記す。後に隆種其二子の無罪

して死ける事を悲みて、岐志村を金龍寺に寄附して、

二子の冥福を求む。金龍寺に今に原田弘種より代々

の石塔位牌、及開山以來數世の住持の位牌、古き涅

槃像有。慶長十六年、長政の家臣高橋伊豆此寺の檀越となり、此寺の事を吹擧して、終に福岡荒戸山に金龍寺を立たり。然れ共其舊地なればとて、此所にも寺を残し置て今に在。

〇三 雲

此里を三雲と名付し事は、里民の説に曰、此村に興雲庵と云寺有。此寺は昔は大寺成しが、其宅中に池有。其池より紫雲三條立し故、三雲と云也。村の東に築山と云る小山有。此山陰に、昔は權現の社有しかや。今はなし。又村の東北の外に茶白山とて、茶臼の形に似たる大塚有。南北十四五間、東西七八間有。上に石佛有。其北に端山と云る塚有。茶臼塚より甚小也。上に權現の社とて有。此等の塚は高麗人の首塚のよし云傳たり。蒙古高勾麗を鷹島にて殺せし時、高麗人の首を爰に埋みし成べし。其寺は高麗寺に立たり。其事は詳に高麗寺の所に顯はせり、茶臼塚は是高麗人を埋めし所成べし。いかさま其形様有げなる塚也。小

なる塚は甚小なれば、夫とは云がたし。もしは茶臼塚に埋み餘りしを、爰に埋みしにや。

○佐々禮石社

三雲村南のはしに在。此神は高祖大明神の御母と云り。然れば木花開耶姫このはなさくやひめを崇奉あがめるならし。神體は小石のよし云り。故にさゞれ石と稱するならん。昔は高祖村より、九月廿六日の祭日に、高祖大明神の御輿出て、此社の側にとゞむ。今は神輿の御幸なし。故に圃となれり。され共今に至る迄、不淨を置事を禁ず。昔は此社の前に、三町餘の馬場有て、祭日には流鏑馬を射たりしが、中絶して此事なく成たるを、近き比村民等昔をしたひ、畠を九十間程馬場とし、今も祭日に流鏑馬を射る。又三雲村の南に村を離れて森有。其内に石有。是を八大龍王と稱す。一説には、彦火火出見尊爰にて出生し給ふ。其印の石共云。木花開耶姫の御社も其あたりに侍るなれば、さも有べき事にやと云。此森の北の方に芝原有。是古高祖

大明神の佐々禮石の社にみゆきの時、此芝原にて里民共、相撲をとりし所也。神輿出さるより此かた、此地にて相撲をとらず。高祖の神前にて取也。然れ共此所今に至る迄田畠とせず。餼羊きやうを存せる也。

○染井山

高麗寺村の内也。染井山靈鷲寺有。其上に熊野權現の社有。里俗の傳に曰、神功皇后三韓を討給はむとて、此山に臨幸ましめて、井のほとりに來り給ひ、異國を討んに勝利を得べきならば、此鎧ひいろ緋色に染るべし。若勝事を得ずんば、本の色成べしとて、鎧を井の水に浸し給ひければ、忽緋に染りぬ。其鎧を染給ひし井なりとて、染井と名付て今に在。此井は染井の側、谷の方に在。本社より西に常る。其廣は方三尺六寸在。此故に染井山と號す。扱右の染給ひし鎧を、山の上なる松樹に懸て干給ひける。此松は鎧懸の松とて、慶長の初迄大木ありしが今は枯てなし。其松の有し側に、緋威の石とて有。其石長五間、高二間、上の平なる處、疊三疊を敷くばかり、

少かたぶける所又同じ。凡六疊を敷くばかり有。緋威の鏡を懸給ひし松の側に在故に、緋威の石とは云成べし。又薬師堂の後の山に、旗染松迎大なる松有。其木の本、周匝めぐり五圍、甚大なる樹也。枝葉甚うるはしく繁り榮えて、他木に異なり、愛賞するに堪たり。枯葉なくして弱樹わかきの如し。篤信曾て諸國を經歷せしに、かゝる松はいまだ見侍らず。山州日の岡の千本松、攝州住吉の津守の庭松、播州曾根の松、明石の老松、高砂の尾上の松、相州金澤の筆捨松、江州唐崎の一松杯、いづれも奇異なれど、美はしき事は是に及べからず。是は神功皇功旗を染て干給ひし故に、此名有。是を以、吹風枝を折すとなむ。今俗に、鏡懸の松と云。又薬師堂の前に老樹の松二樹有。二樹共に其枝道に向ひ右に轉じて、甚奇異なる靈木也。地にはへる如くなれば、是を匍匐松と云。其末は又兩枝共に高くのぼり、聳えて相向へり。攝州住吉の社官津寺氏の宅中、神功皇后の正印殿の前なる老松は、

津守國基初て植しかば、既に六百年に及ぶと云。此松も彼木によく髣髴たれば、數百年を経たる木成べし。

此山昔は豊玉姫鎮座ましく、上宮中宮下宮とて三所に宮地をしめ、神廟尊くして、さばかり繁榮の地成しとかや。今は唯其名のみ残り。其後聖武天皇の

勅願として、清賀上人此地に始て寺を立、僧舎四十二坊を作りて、染井山靈鷲寺と號して、藥師堂を安

置せり。俗説又は雜書に、神功皇后僧清賀に勅して、怡土郡に寺を五ヶ所建立し玉ふと云。甚笑ふに堪たり。神功皇后の

御時は、未だ佛法日本に傳來せず。何ぞ寺を立給ふ事あらんや。小倉山に在古き文書に、聖武天皇の時、僧清賀をして小藏寺を立らる

る由見えたり。是異説ならん。頭書爰に記す。元祿八乙亥年光之公より永代米十俵宛修理の爲に御寄附被成候事。夫より

後は偏に寺院と成て、神社は側に残り、佛堂は本殿のごとくなれり。昔は此社に神領も多く寄附せられ、

舊き文書など多く有しが、明應八年凶賊亂入して散失せし由、大内家の文に在。四十二坊も絶て、唯一坊

のみ残り。阿闍井坊、石橋坊、湯屋坊、能圓坊、中坊、寮所坊、な

どは其名残り、其餘は名さへ定かならず。阿闍井坊、昔の築山の址在。湯屋坊の池は雪舟繪をかきて、凡此地の風

掘せたりと云。長三間許、横二間許、水たまれり。景佳勝なる事他に異也。尤遊觀して幽賞すべき靈地

也。凡怡土志摩兩郡に五佛とて、名像五所に在。東は、染井山靈鷲寺本尊薬師、南は、雷山千如寺本尊觀音、西は、一貴山夷魔寺本尊阿彌陀、北は、登志山誓願寺今津に在り。本尊釋迦、中央は、太祖山大日寺本尊大日也。泊村に在り。

○飯氏村

染井山の北に在て近し。飯氏と名付し其故不詳。又飯氏村の境内に立石原と云所有。道筋也。其所に石佛二體有。村民是を夫婦石と云。其石あるに依て、立石原と云也。此所に夜々狐火をともす。又青鷺も時に飛かける事有。其光燐火の如し。

○高麗寺村

後宇多院弘安四年、大元より蒙古の兵來て日本を攻、此折節、高麗王暎、中華に朝せられしが、元の兵に加勢して日本を攻んとて、兵を日本に渡す。中華高麗軍兵凡十餘萬人、志賀島、殘島迄寄來れり。日本人待かけて戦ひしかば、一本に閏七月八月朔日大風吹く、異國の兵船

破損して、人多く溺死して、五龍山の下に漂着し、糧米盡けるを、日本人是を捕へ、二萬人を耶珂川の邊りにて殺しける。此時高麗人の首を此地に埋め、寺を立て供養しける故に、高麗寺と名付。是は鷹島にて打殺したりし高麗人を、程

近ければ爰に埋しならん。此軍の事詳に博多の部にのせたり。俗説に、元朝より日本を攻し兵を、むくり、こくりと云。むくは蒙古也。音通ず。

こくりは高勾麗也。是又音通ず。高勾麗は高麗の本名也。蒙古高勾麗より日本を攻し故に、其兵をむくりこくりとは云ひし也。今は其寺は亡びて、村の名となれり。彼高麗人の首を埋みしと云所、今は塚はなくて、甲掛よろひかけの松の下に唯其址と云傳へたるのみにて、首塚と云べき所に非ず。此近村三雲に、高麗人の首を埋しと云傳へたる塚有。高麗人の首をば三雲に埋み、寺をば爰に立しにや。高麗寺の舊址は村より北の方山の上に在。近き世迄礎など残りて有しとぞ。今は畠に成し、其邊を堂地畠と云。其下に今も纒なる観音堂有。此寺の本尊は丈六阿彌陀の三尊成しと、舊記

に見えたり。凡筑前五所の誓願寺と云るは、雷山靈鷲寺、後に千如寺と號す。一貴山夷巍寺、染井山靈鷲寺、高麗寺、山號不詳背振山東門寺也。雷山、一貴山、染井山など聖武帝の勅を受けて、清賀と云る僧、寺を建たるよしなり。

○大門村

昔高祖の城有し時、大門を立たる所なるが故、村の名とす。

○周船寺

村の名也。雷山の古き文書に主船司と書り。寛永六年四月十一日、村民新藏と云し者、村の南道路の上なる丸隈山と云所に、石棺有由夢に見て、八月廿一日より掘懸り、同廿七日に掘出せり。石棺長七尺、横五尺、其内に隔有て、石の枕有。髑髏兩方に二有。一は女人の首と見えて、手にふれし時則くだけぬ。一は大なる髑髏にて今猶存せり。棺の内をば皆朱を以て詰たり。又棺中に刀鏃かたなやじりなどくさりて、形許残れり。鏡

三面有。大成は八寸、中成は五寸五歩、小成は五寸許有。右の大なる獨體並鏡杯、猶新藏が子孫の家に在。石棺の外に石窟有。長二間、横七尺、高六尺許有。上は大石を覆ひ、口も亦石を以て是ぞふさぐ。棺と石窟の間も朱にて詰たり。前の國主忠之公此由を聞給ひ、三間四方の堂を彼地に作りて、獨體を納させ給ふ。寛文中頽破して、今はなし。是誰人の墓にや。姓と名を知らず。石棺明器ういきなどの有様は、さばかりの富貴の人を葬れる所成べけれ共、碑字なければ知がたし。原田氏などを葬りしにや。

○夷 魔 山

徳永村の内、横濱と云所に在。山上に熊野三所権現の御社有。凡熊野権現と云るは、伊弉諾尊、事解男ことさかしを、連玉男はつたまのをの三神を云也。いづれの時此地に勸請せしにや、時代分明ならず。社家の説に、神功皇后異國より歸朝ましめて、勸請せさせ給ひしと云傳たり。社の上、山の絶頂に、なる神の岩とて、大なる岩有。

昔は此所にも社有しか共、今は絶て無し。又社の下に観音堂有。北の麓に十五堂有。是は昔海賊今津誓願寺の十王を盗み、此地に捨置し故、其所に堂を立て入置しとかや。今は十王の像今津に在。此夷魔山の麓横濱は、初は民家なし。慶長年中に始て民家を立たり。此所にて怡土、志摩兩郡より出す米薪木など、舟に積て福岡へ送る。夷魔山の北の出崎より今津に渡る所には、舟なし。今津の渡舟を高聲に呼寄て、舟に乗り、今津に渡る。

○安あん上のう

上原村かみはるの南、高磯山たかその北の麓に廣原有。是を安上と云。里民の説に、昔平家の一門、安徳天皇に供奉して、都を落、西國に下て、岩戸少卿大藏種直の許に寓居ありし時、筑紫に都を定め、内裏を作らるべしと、公卿詮議有て、此所を其地に定め要害を能くせんと、九州の人数を集て、隍を掘らせられし址有。第一の隍は山の中を切通して相原迄ほり、第二の隍は上の原

のはづれに在。第三の隍は青木村の入口に在。今は田となれり。三の隍深くして甚長し。許多そこはくの民力を用ずしては輒く掘べきに非ず。かゝりしかども、緒方三郎惟義等平家に叛きし故、此國を去て四國に赴給ひしかば、隍を掘たる迄にて、屋作りはなかりしと云へり。安徳天皇の皇居に定りしかば、安上と云。村民の説かくの如し。然れ共此地は谷の内窮僻にて、境内廣からず。要害なき所なれば、皇居を立べき所にあらず。廣くして皇居に成べき要害の地は國中に多し。おそらくは此地を皇居に定むべからず。是は高祖城の北の麓に在て、搦手なれば、其要害に設けたる三重の隍なるべし。上原の上高き所に、原田氏家士の宅地有。又上原村の上に、小田部陣、草野陣など云所有。是昔原田を攻し時、寄手の陣所也と云。安上の北の方に、黒田長政公の側室長徳院の墓所有。又上原村に長徳院の宅址有。是筑紫上野介廣門の女にして、長政公の子息黒田甚四郎政冬の母也。寛永

七年七月五日に上原にて卒せらる。政冬は先だつて卒せられ、博多聖福寺に葬りしによりて、長徳院も一所に葬るべき由遺言せられし故、此所にて火化し、其骨を聖福寺に葬る。此所茶毘の地なる故、こゝにも墓を立おけり。今は年久敷成にたれば、遠をおひ、昔を忍ぶ人も漸く稀にして、年々に春の草のみ生茂りて、見る人哀を催せり。

○鉢伏山

鉢伏山金剛寺の跡、上原村かみはるの上、高祖山の北の麓に在。安上あんの上より遙に谷の奥に在。昔は大寺にて僧坊も多かりしとかや。是怡土郡七箇寺の一也。坊中の舊跡今は竹林となれり。甚廣し。昔の本尊の観音今は朽木と成、今猶少し残れり。村民近き比、纒なる草庵一字を立て、別に新に観音の小像を刻んで安置す。彼小菴の向に、鉢伏岩とて大岩有。其形鉢を伏たるが如く成によりて、此名有にや。俗には、弘法大師鉢を伏せし岩也と云傳へり。凡鉢伏と云所は、

爰のみに限らず、他國にも同名有。山城國乙訓郡小鹽山の麓に、鉢伏と云所有。又源平盛衰記三十七卷にも、攝津國鷦越の一谷の上に、鉢伏と云所有と見えたり。凡怡土郡七箇寺と云るは、雷山千如寺、雷村に在。染井山靈鷲寺、染井村にあり。一貴山夷巍寺、一貴山村にあり。小倉山小藏寺、小倉村に在。鉢伏山金剛寺、久安寺、山號不詳、吉井村に在。楠田寺、山號不詳、東村に在。皆眞言宗なりしと云。

○叶 嶽

叶嶽昔天勾山と云。此山怡土郡と早良郡との境は峰を以分つ。山上に地藏堂有。怡土郡上原村に屬せり。昔此山上に大岩有。上原村吉住因幡と云者、地藏堂を山上に立んとせしに、大岩故にのけがたくして、其上に堂を立たり。其後火災出來、堂焼、石も焼われて谷に落、其地に又堂を立、石佛を安置せり。天正年中、高祖の城主原田了榮此堂を改造し、田地二反餘寄附せらる。今も上原村の内に地藏田と云字有。忠之公寛永八年に改作し給ふ。因幡が八世の孫、今も

上原村に在て、此堂を守る。僧には非ず。毎月廿四日には參詣の人有り。ことに正月六日には、遠近より詣來る者甚多し。商賈も數十人集れり。山上の眺望又よし。上原より登れば坂けはしからず。早良郡野方の方より上れば路甚さかし。

○千里村

村の西、田の中に石佛有。横五尺、縦六尺、是高麗より來りしと云。千里の遠きを経て來りし故、此所を千里と云ならむ。

○末永村

昔は西堂と川を隔て相並べり。寛文の年今の地に移れり。

○井原村

三雲村より南に在て平原の地也。郡中第一の廣村にして、膏腴の地也。殊に三雲村と井原村との間の地を境畠と稱す。近年多くは水田と成。國中第一の上田とす。民家は多く巷をなして町の如し。村より南に

御所山とて小き山有。御所山といへば故有べき所なれ共、其由しれず。村の西に高き原有り。曾根原と云。其形山城國長岡に似たり。地廣平にして皆島とす。

南北半里餘、東西八九町有。其南は山に續て麓に山北村、高上村有。兩村共に曾根原の原頭也。此岡の北の端の麓に在村を平原と云は、元有田村の枝村也。有田村、平原村は公領也。かゝる廣き岡は國中に稀也。

其上に十三塚有て並べり。又穴塚多し。俗には鬼塚と云。其口は皆南に向へり。是は十三塚より大也。又井原村のはるか南に野田山とて竹山有。鹿我子山かがしとて木山有。村の内に松井鹿我子とて枝村あり。また安養寺中宮などいふ小村も此村の内なり。(異本)昔は西堂、末永、瑞梅寺、井原山など、皆井原村に屬せりと云。然ば國中にてはいと大なる村なるべし。

近世は別村に分る。凡此村は廣平の地にて、四方に村數多く相つらなれり。(以下異本之を略す)昔より

此村に邦君の別館有。

頭書爰に記す。別館今はなし。里民の云、昔は別館有し時、唐津の領主大久

保氏、毎に此所に遊狩有て、此別館に寓し玉ふ由申傳と云。其後別館を前原驛に遺して建之と云傳也。

○井原山

井原村の南に高山有。是を井原山と云。山の北に井原村有。今は瑞梅寺村に屬す。此村は井原村の南の奥に有。井原村の西より川にさかのぼりて、深き谷に入事一里餘、深山の内に在。其間の山中水石うるはし。井原山村の下流十餘町、道の西の側に大なる石有。其石の傍に横に細き長さ穴有。其内に鼠色の蝨有。大ならず。外より見ゆ。石中に在て出る事かたし。何の時より爰に籠れりやいぶかし。道を行人是に蟲をあたふれば食す。又井原村より北六町下流に、大なる瀧有。此瀧は大石唯一にて、水の流るゝ所は、態と堀うがてるがごとし。瀧の長八間許、其間二段有。下の段は鱗のぼる。上段は水勢甚早く強して、鱗のぼる事あたはず。故に鱗返りと云。直に下に落瀑布に非ず。急流也。直におつる瀧は諸州に多し。急流の如此うるはしきは世に稀成べし。吉野西川の

瀧も急流なれ共、是に及ばず。見る人目を驚かす。其下に深淵有。此村は中に小山を隔て東西兩村有。東を本村とす。凡此里は谷口せばく、奥廣くして、恰陶淵明の桃花源記に記せるが如し。山の形、川の勢ひ見所多く、宅幽ヤところに勢ひ沮にして、誠に隱者の盤旋はんせんし、仙客の遊衍すべき佳境也。此所山の中ゆたかに廣く、谷の數重り多くして、土地肥饒なれ共、材木少し。若郭橐駝くわくたつたが功を爰に用て、杉檜桐漆桑槐茶桃柅栗棗くわんしなづめ等有用の樹を植、管子が十年の計を爲ば、其富千戸侯に等からん。豈惜べき事に非ずや。此山中は谷々多くして甚廣き故に、凶年饑歲には怡土志摩兩郡の貧民、餓死を免れむ爲、正月より此山に入、葛蕨の根を堀つて、たゞきて水ひし、其粉を取、餅とし、朝夕是を食ふ事、春三月に至。遠村の民は此山中に小屋を掛、妻子家累を携來りて、恰も市町の如にして群り集る事、數百軒と云事を知ず。三月を過て山を出、近村の民は、我家より日々爰に來て堀とる。如

此する者幾千百人と云數を知ず。他郡に山多けれ共其利養是に及ばず。然ば此山は、兩郡若干の人民の命をつく所なれば、殊玉多きより猶勝りて、眞の寶の山と云つべし。又井原山村より半里許奥にだるめきと云瀧有。南の高山を越て廣谷有。水無と云。此所は飯場村の川上にあり。飯場村の所に詳に記す。

○井原川

其源井原山より出。井原の西を流る。この川に鱒、鰻、鱺、はへ、津蟹など多く、又川上には川鳥と云鳥有。又西堂川は井原村の東を流る。其源河原山より出。王丸西堂末永村を過、井田村の西にて井原川と一に落合、板持村の東を経て、太郎丸の枝村、河下と云所にて海に入る。

○瑞梅寺

瑞梅寺村に在。天徳山授寶院と號す。井原村より井原山へ行道の西の山の側に在。此所昔は別所と云。井原の庄内也。近代は別村と成小村也。瑞梅寺立し

より別所とは稱せず。村中に觀音堂有。則是瑞梅寺也。此寺は後圓融院康曆元年に、乙丸美濃守種綱、楊井入道道寂兩人心を合て創立し、常樂寺の住持仁教和尚を以て開山とす。常樂寺は志摩郡青木村に在。此事此所に傳れる古き文書に載たり。又改て護聖山と號す。今は禪寺也。本尊は如意輪觀音にして古佛也。昔は寺も榮え、寺領も多かりしとかや。肥前國小城郡榮泉寺並免田知行不可有相違一由、大永七年平胤勝の瑞梅寺に送りし狀有。今は纔成る草堂一字有。此堂に上り、目を遊しめて遠く眺望すれば、眼界廣しくて絶景の佳境也。此山に矢筈竹多し。又羊乳根多し。其形他境に在に替れり。丸し。性よし。蔓草なり。

○雷 山

雷村の山也。一本云、雷村の山也。麓なる高野より一里許坂を上りて、高き所に雷村有。其地肥饒にして林うるはし。其高き所を層増岐と云。其絶頂は魔

所也とて、俗人往來せず。村中に在。中宮より絶頂迄一里許り有。日本紀を考ふるに、仲哀天皇九年三月壬申朔戊子、神功皇后羽白熊鷲はしろくまじしを討ん迎、香椎の宮より松峽宮に遷給ふ。松峽は竈門山の下に在。辛卯に層増岐野にいたり、則兵を擧て羽白熊鷲を討て、是を殺し給ふと有。此所則層増岐野也。御笠郡より遠く此所に來り給ひ、又夜須郡に至り、羽白熊鷲を討給ひし事は、夜須郡にては軍勢集らずして、熊鷲を討給ふ事叶がたく、伊觀縣主は最初に歸服せしもの成故、爰に來り軍兵を集て、再び夜須郡に赴き、熊鷲を討給ひし成べし。さればこそ、層増岐野に至り兵を擧給ふとは傳るならん。此所に神功皇后の御遺跡多く、殊に古よりの文書舊記等にも、層増岐野と侍れば、是則層増岐野成事疑ひなし。凡此境に神社三所有。層増岐野に在神を上宮と云。祭所の神を層増岐明神と號す。瓊々杵尊成べし。高祖の社の縁起に見えたり。中宮に祭所の神五座、中殿をば水火

雷電神と云り。左脇に高祖聖母の二神座す。右脇に住吉八幡の二神座す。社は東に向へり。中宮は村の中、いと高き所に在。水火雷電神と云るは、日本紀に所謂、伊弉諾尊劔を抜く軻遇突智を斬て二段きどとなす。其一段きど是雷神と成と有。則是雷神の鎮座有所成故、雷山と云。其餘の四神は後世相殿に祝奉る成べし。下宮は香合石かうがふせきの下一町許、道の西に在。笠折權現と云。則上宮を爰に勸請せる也。高祖明神、住吉大神を左右に配し祭る。九月十九日祭有。又毎月十九日にも祭る。されば雷神に雨乞をし侍るに、昔より今に至る迄、其驗あらずと云事なし。昔は帝王及將軍家の御祈願所として、數百町餘の神領を寄附せられ、さしも繁榮の地成しにや。綸旨御教書國主領主の文書多く傳れり。近古九州大に亂し時、神領も沒收せられぬ。天正十三年二月十八日、秀吉公に雷山衆徒中より年頭の爲、祝儀卷數として並杉原十帖を捧しに、秀吉公直書御朱印を給る。今に此山に在。此時迄は猶公

儀へ直に使を達しける。天正十五年小早川隆景、當國の主と成給ひし時、六十六石の寺産を寄附せらる。其義子秀秋の時、是をも沒收せられしが、忠之公拾壹石餘の寺産を寄附有。觀應二年七月の比、旱甚しかりしかば、(以下一本に追補)足利直冬當社に參詣し、祠官僧侶等に命じて、あまこひ雲をせしに、忽に雷鳴て雨降ければ、直冬神異の思ひをなし、一首の和歌を詠じて、神殿に献ず。其歌に、

一本云、世の末と
末の世といかでおもはむ鳴神の

またあらたなる天が下哉

此歌本書今に傳れり。社家の舊説には神功皇后三韓を征伐せん迎、先此山に上り給ひ、層増岐岳もそきだけにして天神地祇を祭り給ふ。かゝる故に層増岐岳の上宮には、天神七代、地神五代の總社として二社有。殊に羽白熊鷲を討ん迎、爰に來り、軍勢を集め給ひし所なればにや。雷村の麓、高野と云枝村に、皇后の御腰を掛給ひしと云傳る白き石有。徑五尺五寸許、高さ三尺許

有。此石をけがし、ふるれば、崇り有りとして、近比其宅の農人、石の上に、茅屋を作り崇め置ぬ。又山中に旗竿山と云所有。是神功皇后の御旗竿を取らせ給ひし所也と云傳たり。其所にも皇后の腰かけさせ給ひし所成とて、方六尺許の石有。又雷の社に上る山路の脇、民宅の傍に香合石とて、高一間、横壹間五尺許なる石有。其形方にして、蓋をしたるが如く成、合せめ有て、かうはこの如し。故に香合石と云。又神護石共云。其上には土おほひて、唯一方のみ外に出たり。社家に傳へて曰、此石は雷神八坂瓊曲玉、ヤ白銅鏡さかにりまがたま、まのみりかみ天叢雲劍、あまのむらくも此三種の神器を中に入れて、納置給ひしと云り。此石の形、箱の蓋を覆ひたるに似たれば、かく附會して云成べし。聖武天皇の勅願所として、清賀上人爰に寺を立て、靈鷲寺と名づく。或は雷音寺共云り。後に改て千如寺と號す。是怡土郡七ヶ寺の一にして、其餘の六ヶ寺も皆雷山を以て本山とす。古へは僧坊十區有しといへ共、近世退轉して今纔に三

坊殘れり。昔の僧坊の跡は田圃と成て、其地に坊の名残れるも多し。今其寺院の上首を

仲ノ坊と云。又寶池坊、總持院あり。總持院は古へ座主職たる僧の住する寺にして、延壽寺と號す。本社の前、左の方に觀音堂有。千手千眼の觀音を安置す。高一丈六尺有。其手の數は誠に千有といふ。さも有べし。是清賀上人作れりと云傳たり。其精巧なる事、畿内及他國にもめづらかなる古佛也。觀音の兩傍に多聞持國の二像、及廿八部衆有。皆木像にして古佛也。此觀音堂の内に大なる釜有。其徑四尺六寸許、深さ三尺五寸許有。是雷山坊中繁榮の時、祭に食物を烹調たる釜なりとかや。古昔には雷山にも山伏居住して、此山にも峯入修行せり。雷山の麓高野に山伏の居たりし坊八區有しと云。寶巖坊と云るのみ其址残りて、其餘は定かならず。又此社の四至、東は限ニ東谷峯ニ。西限ニ旗振嶽ニ。南限ニ祖會岐ニ。北限ニ立石ニ。と縁起に見えたり。凡雷山は山櫻多く、寺にも八重櫻有て、花の盛はいと興有。都近き所ならましかば、古人の

吟賞にも預り、誠に山の甲斐あらん所なるをや。斯る高山深谷の僻所の内にも、此佳境有事珍し。山川好處造化惜不_レ許_ニ世人_一平地看_ルと古人のいへりしもかゝる所成べし。いとま有人は尤遊賞すべき所也。雷村より肥前國無津呂村に越る道一里許有。其間に大峠とて坂有。無津呂は茶を多く植て、土民の産とする所也。山中にある村也。又雷村の西に怡土城の址有。其下に筒の瀑布有。其詳なる事は、古戦場の記にしるせり。

○雷 川

雷山より出る川也。御坂、藏持、有田、畑郷、由比、江田村を過、前原の北にて海に入る。

○御_み坂村

雷山の北の麓に在。神功皇后雷山に上らせ給ひ、下りて休_{いこは}せ給ふ所也。故に御坂と云とぞ。初は此村田の中に在しが、永祿の末原田氏と龍造寺戦ひ有て、原田領分を肥前より侵し掠し故、其侵伐をさけむと

て、川の南高き所山際に添て村を立て、要害にせしと也。其所の岸に、今も石壁残りて長くつらなれり。され共近代は世靜に成て、侵掠の憂なく、村民の膏澤皆川に流て、耕作の便惡しとて、寛文十一年又田の中に移せり。又今の村より五町下に、八島と云し枝村有しが、是も同時に一所に移る。今の御坂村ある所は、永祿の末迄民屋ありし村址より下に立り。古の御坂村の址、今も屋敷田と云。又西の岡の上に、正蓮寺の故墟有。今は民宅となれり。其寺始めは眞言宗なりしが、後に禪宗となる。足利尊氏の時、雷山と隙有つて、雷山に夜討を懸けむとせしに、事顯はれて追放せられ、寺終に絶ぬ。此寺昔は富貴にして、寺領幾許多かりしとかや。其時の薬師、観音、地藏の三佛、今に残れり。

○多久村

和名抄に、怡土郡の郷の名に託杜在。たくのもり多久と云も其名の残れるならん。此村の原の上に、大なる塚兩所に

在。其上に大なる松樹生たり。二の塚其間相去事一町餘有。村民是を夫婦塚と云傳へたれ共、其姓名をしらず。

○篠原村

昔此村に清淨寺と云寺有。本尊は等身正觀音にて、佛師春日の作なりしとなん。此寺は後三條院延久年中に、當國司藤原朝臣俊雅建られしと也。始は天台宗にして、早良郡背振山上宮東門寺の末寺なりしが、正安の比より濟下入禪宗となれりとかや。今は其址さへ定かならず。篠原村の枝村に延命寺と云所有。昔は此所に延命寺と云寺有し故、所の名とす。此寺は怡土郡深井山の末寺にして、眞言秘密の道場也。弘法大師歸朝の時、造られし地藏佛を以て本尊とせしよし、古き文書に見えたり。此寺も何の比よりか廢して、今はなし。

○飯場村

飯場は早良郡の金武より一里半長坂を越行、深谷の

に在る村也。又當郡河原村より飯場へ越る道有。其間三十二町有。其峠を、むしぶくと云。此村は谷の中狭くして田畠少し。村民毎日薪芒すきを福岡に持出て賣る。此谷の下の入口は早良郡内野、其上は石竈、其上は曲淵、其上は此村也。下の三村は早良郡也。飯場も同じ谷の上にあれ共、怡土郡に屬せり。此村は曲淵の少上に在。飯場村の前なる谷水は、水無より出る谷水には非ず。飯場の三町下、曲淵の上に西南より流出る谷川有。是水無より出る川也。其川上八町に野河内村有。是飯場の枝村也。是又地高し。其西半里餘を上り行て水無有。其間路けはし。水の流は急流にて瀧多し。水無の方甚高ければ也。此村より肥前の境迄一里、肥前の三瀬へ三里有。佐賀へ行道也。

○水 無

飯場の枝村、野河内より半里餘上に在、石竈、曲淵の谷の上也。野河内も飯場より上り行て地高し。野河

内より上は、又漸高き坂を上り行。其間左に谷川有。瀧多し。又井原村の南の高山を越て水無に行。是は谷筋には非ず。井原山と水無とは高山を隔て別谷也。水無の南の谷中に在。谷水も井原山の方へは流れず、曲淵に至て早良川に入る。深山幽谷の内にて谷内廣からず。昔は人家も田畠もなし。近年民家三家でき、田畠を作る、飯場村より一里許有。飯場村は早良の奥に在て、其地いと高し。水無は飯場より又甚高し。冬春甚寒く、夏蚊なし。地肥て草木うるはし。奇木異草多し。四方の村里に各一里餘有。皆險路也。民家の上三町許の間、此谷水半月は甚水少し。久旱きうかんの時も水なし。故に水無と云。かやうの所他國にも是有和州吉野の奥、音無川も亦然り。水無よりも南の山は筑前肥前の境也。嶺迄十餘町有。其西に猶十餘町行ば、うなされと云所有。肥前の境也。昔原田了榮と龍造寺隆信の臣神代氏と合戦せし所也。又童瀧と云瀧有。高六間許、其上に兄の瀧有。高十間許有。

公領

此國の内、博多の代地として、公に被召上し事、既に此卷首に記せり。長政公當國を初て領し給ひし時は、唐津城主寺澤氏の領地たり。寛永の末年、寺澤氏亡て後、わかれて公領及唐津領となる。

○長野村

御坂の西に在。隣村也。大邑にして境内一里有と云。和名抄を考ふれば、長野は怡土郡の郷の名也。當昔此村は宇瀬八幡の神領成しとかや。故に八幡宮を勸請せし社有。大なる社也。此社の社官等、八月十五日には、糟屋郡宇美の本社に詣て、神輿御幸の供奉し侍りけるとぞ。

○小倉山

小倉村の上に在。石徑廿町上れば、小倉迎小なる村有。又熊野三所權現の社有。龍樹權現も相殿に祭れり。十一月十八日祭禮有。女人の參詣を免さず。社家者の説には、神功皇后の勸請し給ひし靈地なりと云。其邊に寺地有。聖武天皇の勅願として、清賀上人創立し小藏寺と號す。社の下に、古佛の觀音堂有。足利尊

氏、其外國主領主の願書寄進狀等甚多し。然れ共雨に朽ち、蟲にはまれて、慥に見えず。惜むべき事なり。昔は寺院僧坊も多かりしとかや。今は纔かに小社及觀音堂一字のみ残り。これも怡土郡七箇寺の内なり。

○龍國寺

波呂村に在。原田治郎太夫種直開基の地なり。種直は平家によしみ深かりし故、始終忠を盡し節を守りける。平家亡て後、鎌倉に召寄せ禁獄せられ、十三年の春秋を過して後、免許を蒙りて筑前に下り、漸に家を立てけるが、小松重盛の爲に此寺を建、菩提所とす。今も重盛公の位牌あり。種直の墓も此地に在。始は天台宗にて、極樂寺といへり。開山を徹慶と云。原田了榮此寺を再興して禪宗とし、龍國寺と名を改め、高祖の金龍寺の末寺とす。了榮の墓も此寺に在り。

○楠田寺

是も此郡七箇寺の隨一也。東村の上に在。今は寺なく、民の栖となりて、住ける僧もなし。小なる地藏堂一字有り。

○東 村

此村に八幡宮有。偏土にては大社也。村上天皇應和年中に、原田氏、男山を勸請すと云り。御社は西に向へり。九月十三日祭禮有て、神輿川端迄御幸有。三年に一度加布里かむりの濱まで出給ふ。又村の中にも原田種直の墓とて有。此所を原田の庄と云。此邊の數村を、すべて庄内と云。其境内を庄内河内と云。

○神 有 村

川有。其源は小倉山及雷山より流出て、此所にて海に入。又此村の境内に、鬼塚迎廣くいさぎよき穴塚有。石窟也。

○岩 本 村

海邊也。町有。民家多し。

○加 布 里

町有。民家多し。漁人も有。海邊にて舟の多き所也。岩本に近し。此里の向ひ、かやの山の麓、邊田にも、是より舟にて渡る。海上七八町有。此里の西に古城の址有。南に天神の社有。此里の名は、中華の書、武備志等にも載せたり。

○田中村

神有村の西に在。此所に大なる塚穴有。塚の内方三間程有り。南の方に口有。内は石垣也。人入ることなし。内には人の骨多し。

○深江

藻鹽草に、深江の郷と有。和名抄には、怡土郡に深江の郷なし。此村は前原を去事一里廿四町西に在て、海邊に在村也。町有。民家多し。前原の西の方には此宿驛ばかりなり。是より西は肥前濱崎に馬驛有。深江より濱崎へ三里廿二町有。深江海は古歌にもよめり。町の中に社有。竈門山神と、天満天神の二神を相殿に祭れり。四月廿日祭禮を行ひ、神輿を出す。

宮司の坊の居る寺を、誕生山神護寺秀覺院と號す。社の傍に秀吉公の御茶屋址有。是朝鮮を討給ひし時、名護屋へ往來の時、此地に宿し給ふ。爰にて秀頼の母淀殿、夢の告に依て、秀頼を胎み給ひければ、秀吉公不斜悦び、當社は則秀頼が産神也と宣ひ、小早川隆景に命じて、此社を改作り給ふ。故に誕生山の號有。

○怡土濱

深江の西の海を、すべて怡土の濱と云。子負原こぶの北也。此濱の内に、神功皇后御船を寄せ給ひし所とて、御濱と云所あり。

懷中抄

綱手繩引切る程に風吹ば

いどの濱迄舟もよりけり

○一貴山

此地も又、神功皇后の神を勸請し給ひし所と云傳へたり。今は名のみ残りて社もなく、何れの神を祭給ひし所にや、考知がたし。西峰老人曰、今案するに、是天目一箇命あまのひとつの社なるか。古語拾遺曰、天目一箇命

は、筑紫、伊勢兩國忌部の祖なりと。一貴と一箇の
轉音か。きと、こと通音也。聖武帝の勅命を請て、僧
清賀此所にも寺を立て、一貴山夷巍寺と號す。怡土
郡七箇寺の隨一也。本尊は阿彌陀にて、僧舎も十二
坊有しとかや。其本尊も僧舎も炎上して、今はなし。
唯二王門形計りに残り、仁王の像のみ門中に立り。
此二王の像甚奇巧也。村人昔を慕ひ、村より奥の方
草深き所に、小堂一字を作り、佛を安置せり。其餘
には寺院もなく、又僧も居らず。今其里の名をば一貴
山村と號して、民家多し。此村は下の平地より漸上り
て、いと高き所にあり。

○子負原

筑前風土記には、子饗原兒饗野など書り。萬葉集卷
五には、筑前國怡土郡深江村子負原、海に臨める岳の
上に二石有。大なるは長一尺二寸六分、圍一尺八寸
六分、重さ十八斤五匁、小なるは長一尺一寸、圍一尺
八寸、重十六斤十匁、並に圓形にして鷄子の如し。

其美妙なる事勝て論ずべからず。所謂徑尺璧是也。

或曰、此二石肥前彼杵^{そのぎ}郡平敷石常占而取^レ之。深江の驛家を去事廿町許。里近く

路頭に在り、公私往來する者、馬より下りて跪拜せず

と云事なし。古老相傳て曰、昔息長足日女命^{おきながたらひひめの}新羅國

を征伐し給ふ時、此兩石を用て、御袖の中に著て鎮^{ちん}

懷^{くわい}し給ふ。(已上萬葉集)

萬葉集五卷

かけまくは、あやにかしこし、たらしひめ、かみのみこと、からくにを、むけたひらげて、みこゝろを、しづめ玉ふと、いとらして、いはひ給ひし、

またまなす、ふたつの石を、世の人にも、しめし玉ひて、萬代に、いひつぐがねと、わだのそこ、おきつふかえの、うなかみの、こふのはらに、みてづから、おかしたまひて、かんながら、かんなさびいます、くしみたま、いまのをつゝに、たふときろかも。

反歌

天地の共に久しく云つげと

このくしみたましかしけらしも

八重御抄に、件の石を、くしみ玉と云也と有。されば日本紀にも、皇后新羅を征伐せんとして赴き給ふ時、適まさに開胎うみつきに當れり。皇后則石を取て腰はさみに挿て、祈て宣く、事竟て還らん日、此土に産れよと。其石今伊觀縣の道の邊に在と云り。釋日本紀に、筑紫風土記を引て曰、子饗原こよのに石兩顆有。一は長一尺二寸、周一尺八寸、一は長一尺一寸、周一尺八寸。色白くして圓き事、磨き成すが如しと云り。又筑前風土記を引て曰、一は長一尺二寸、大さ一尺、重四十一斤、一は長一尺一寸、大さ一尺、重四十九斤、其石を號して皇子産石と云。今訛て兒饗石と云と見えたり。此兩説は、萬葉集の説と其重さ大に異也。今深江の町より五町許西、大道の南の高き所に、里民子負原と云傳ふる所有。又萩の原共云。今より百年以前迄は、此兩石猶此地に在しを見たる由云者有て、寛永の末迄存せしと云。其後盜人取て、今はなし。貞享二年其

所に八幡の社を創立す。是は昔皇后の御腰にはさみ給ふ石、此邊に在しを盗人取て失ぬ。近年深江の村民六郎と云者、其邊に捨て有しを見出せしとて、一の石を持來れり。民家に納置しに、山鳩一其家に飛入し故、諸人彌此石を尊敬す。依之深江の民此社を建て、其石を納む。横七寸、高六寸、徑五寸、色は少赤青也。石は唯一也。今案するに、此石萬葉集、風土記の説に比するに、唯ちひさし。久しきを経ても耗^{へる}べき物ならねば、ちひさくなるべき理なし。いぶかしく覺侍る。萬葉集に、子負原は深江を去事廿里許と云。今里民の子負原と稱する所は、深江の驛より五町許西に在。道の側海に臨める丘なれば、萬葉集に載たる所是なるべし。是より西に子負原と云べき所なし。唯路程の遠近同じからざる事いぶかし。

○深江 川 川の廣さ十一間許。

三吉村、瀬戸村より出、深江にて海に入る。

○久安寺

吉井村の境内うきだけ浮岳の下に其址有。此寺は昔怡土郡七箇寺の一也。今は寺なし。

○浮うき岳だけ

吉井村の南に在。高山也。浮岳うきだけの西、にとんばうと云山有。又浮岳の東に高山有。めだけと云。又眞名子とんばうとも云。東西に在。

○眞名子まなご村

福井村の南、妻嶽と云高山を越て、南の麓、谷底にある平地也。福井村より越る。又佐波村淀川村よりも越る道有。眞名子村より西南の山を越て、唐津領七山の内、藤川村、荒川村、白木村へ行道有。凡怡土郡の諸村は、皆山より北に在。唯此村のみ高山の南、肥前の方に在。福井村より一里有。

唐津領

○葉は島じま
此島古歌によめる
怡土島なるべし。

吉井村の北、海上四町餘有。小島也。島の長四町、横一町半許有。此島に松、矢筈竹多し。石のみ有て

土少し。

六帖

下ひもの夕さりかけてときつれば

君がみそぬふいとこの濱みゆ

○吉井川

浮岳より流出る水わかれて、吉井川、福井川となる。

○橋たちはな嶺たうげ

吉井村の西、鹿家村の東に在。高さ坂也。

○鹿しか家か嶺たうげ

鹿家村の西にある坂也。橋嶺とは別也。

○包つみ石

鹿冢村の西、大道より北の海邊に在。大なる石二有。

其内の大石、小石をつゝみたる故に包石と云り。此邊

南に小川有。是筑紫と肥前の境也。是迄前原より四

里有。此西の道の山の上より、松浦の方、鏡山、唐

津の城など能く見ゆ。佳景なり。鏡山を俗に比禮振山と云は訛也。比禮振山は名護

屋の北也。

○關屋三所

此郡西の大道に關屋三所有。前原に筑紫國主よりの
關所有。岩本の東に公領の關所有。福井の東に唐津
領の關所有。前原の西より公領也。福井より西は唐
津領なり。

筑前國續風土記卷之二十二終